

澁島郷者寺とそ
の伝承

エコツアーカフェK0ZU
開催のお知らせ

神津島

を知ろう!!

ゲスト梅田勝海さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、
参加自由です。

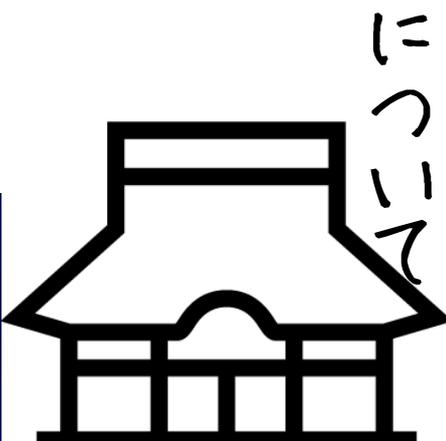
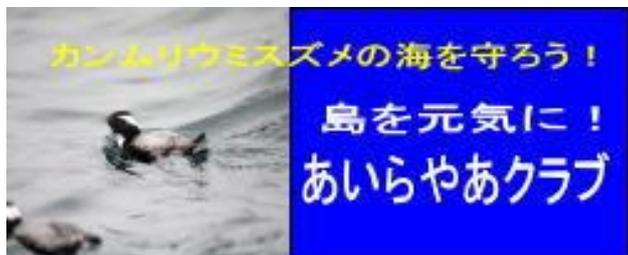
「エコツアーカフェ」は、地域や、地域の未来などに
関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時 12月12日(木)

午後7:30~午後9:00

会場 開発センター

主催 神津島村商工会 (Tel8-0232)



濤響寺とその伝承

島の人の唯一の菩提寺の、延命山濤響寺は浄土宗の寺で、寛永十六年（西暦一六三九年）に、島の鎮守の宮司と地役人を世襲した松江家の宗祖、石田因幡の勧請で伊豆下田の海善寺からの派遣僧を受け入れて開基され、当時は小学校の下辺りに藁葺きの庵を建て、寺号を矢割山と決めました。

豊臣秀吉は明国（現中国）経略の前提として、朝鮮の服属を強要したが拒まれ文禄一年（西暦一五九二年）加藤清正と小西行長に兵十五万を送り、初めは連戦連勝でしたが、朝鮮総督李舜臣（りしゅんしん）の水軍に大敗、翌年の文禄二年（一五九三年）に、明の使節沈惟敬（しんいけい）と和を結びました。

その時小西行長は路傍にたたずむ一人の女兒を、日本に連れ帰ったとされそれがジュリアとされています。

行長は肥後半国（現熊本県宇土市）の領主で、夫妻ともキリシタン信者であったので、ジュリアも連れられてキリスト信者となり、オタ、ジュリアの洗礼名を承けました。

キリスト教を統治体制への悪害として豊臣秀吉の伴天連追放令や、徳川幕府の

キリスト禁教令で、慶長十七年（西暦一六一二年）に当時駿府（静岡市）の徳川家康の庇護を受けていたジュリアがキリシタンの信仰を捨てないので、世の人の見せしめとして駿府から伊豆網代へ送られ、それから舟に乗せられ大島・新島を経て神津島に流されました。

ジュリアは神津島でもキリシタン信仰の生活を守り、死没したとされる六十余歳までの四十年、ジュリアの信仰の祈りの姿は、キリスト者としての意識がなくとも島の人には大きな影響を与えたと考えられます。

また小西行長は堺の薬種の豪商、小西隆佐（こにしりゅうさ）の子息で、薬種買い付けの為頻繁に中国の明に航海していて薬についての知識があり、そこで暮らすジュリアも薬の知識があったと思われる、小西行長没落の後徳川家康の庇護を受け、駿府の大奥での女性社会での生活で、女性特有の病気の手当てにも経験があったので、島の人たちの病気の手当てをしていたと思われる。

また他の流人の墓には島で「こうばな」と呼ぶ柘を、花器に挿してありますが、ジュリアの墓には（さかき）榊を挿してあります、ジュリアが島の人たちに愛されていたことが、神の墓と島人に大切にされて来たものでしょう。
神津島村史に次ぎの様な記述があります。

「小西行長没落後ジュリアは、徳川家康の駿府に居住することになり、当時駿府は教会堂が建立されるほど、天主教が盛んでジュリアも信者として、教会に出入りしていたと言います、徳川のキリシタ禁教令布告後、徳川家康は早速脱教を迫りますが、ジュリアはひたすら神への祈りの生活を続けたので、家康は激昂してジュリアに流刑を言い渡し、伊豆の網代から大島、新島を経て神津島に送られました。

神津島でもジュリアは、祈りの日を送ったので、ジュリアの祈る神がどのよう中神か判らなくともその祈りの姿に心惹かれる島人が多くなったので、時の島の地役人石田因幡は、その対策として佛教寺院の開基を計ったと見る事も出来ます。

寛永十六年に建立した「矢割山」は、宝永の年（西暦一七〇四年、一七〇九年）のポチ火事で類焼、また延享四年（西暦一七四七年）の下の沢火事で再建したこの草案も再度焼けてしまいました。

第九世専榮上人の時に、鈴木惣七家のほか他の家の土地を、村有地と交換して、海岸寄りの現在の地に移りましたが、これは季節風のことや火災のことを考えて、部落の風上へ寺を建てる判断があったもので、部落からは数段も低い位置に建てられています、その時寺号を「延命山」と改めましたが、まだ草案程度ものであったようです。

島はその後享和の年から明治初期（西暦一八〇一年～一八七七年）まで、かつを

の豊漁が続きて、文化元年（西暦一八〇四年）時の地役人松江右京の、発起で伽藍の建設に着手することになり、伊豆下田より棟梁臼井久八を招き、また島人の奉仕で建築が始まりました。

経済的に余裕があるとは言え、島人の労役の負担は大変だったと言ひ伝えられています、**濤響寺**の過去帳によると島人は落成までほと、揃いをはおり念仏を唱えて、きつい奉仕作業が続くと記されていますが、老若男女の奉仕作業に、佛への篤い信仰とお寺への敬慕はかえって深まり、重い労働も心を合わせたことに誇りと楽しみさえ覚えたとしています。

（またその中に、そろえをはおりと有るので、揃いの半被でも作ったものでしようか）

この建築は文化三年（西暦一八〇六年）の八月に上棟式を挙げ、その年の暮れ近くにようやく現在の伽藍が落慶しました。

建築の様式は、屋根は宝形作りで、本堂内には正面を一段高くして内陣を設け、

御本尊佛を祀る祭壇はまた数段高くしつらえてあり、このような形式はかなり珍しいものと言われています。

伽藍内外の組み物や取り付けられた彫刻物は、二百年経た今でも深みのある色彩を残し、素晴らしい出来栄えにこの建築に参加した当時の職人たちの技術の冴えに頷かされます。

また本堂内の太い丸柱もきれいに磨き上げられて、長い歴史の艶が光を返しています。

また本堂の格子戸を引き空けると、正面の欄間に山号の「延命山」と金文字で書かれて架けられている扁額は、楽翁と呼ばれ奥州白河「福島県の一部」の藩主で、後幕政老中の要職に就き寛政の改革を行った、松平越中守定信の書とされています。

扁額の裏面に（文政二年四月三日、左近将源定信書 奉 国誉上人之代とあり、定信が老中の職に就いたのは天明七年から寛政五年（西暦一七八七年～一七九三年）までであるので、この扁額の揮毫は老中の職を辞してから以後と考えられます。また、納額、江戸住、島屋八右衛門、主、親類中とあるのでこの扁額の送り主の名が記載されていますが、この関係は判りませんが今後調査をしたいと考えております。

内陣の奥に祀られている御本尊佛は、元禄元年（西暦一六八八年）「十五夜婆さん」の伝承にまつわる、阿弥陀如来の立像と、開基以来の御本尊佛地藏菩薩像は、

は平安時代に天台宗の僧侶で、比叡山の恵心院に住まいした恵心僧都の作と伝えられ、かつて濤響寺の御本尊であったが、ある時期に阿弥陀如来像に代わったと伝えられています。

本堂の裏手と左側一帯は、島の家の墓地で狭い通路を挟んで墓石が並び、この墓地には朝と夕べ、墓石の前で四季の花を彩りよく供え、水を替え線香を上げて読経をしている風情は、島人の人情の厚さを表しているようです。

◎、十五夜婆さんと御本尊（濤響寺の伝承から）

元禄元年（西暦一六八八年）の話です。

島の前田市郎平家の嫁は、人一倍信心深い女でした、或る夜のこと、この嫁の夢枕に佛が現れて「島の多幸の浜へ私を迎えに来て欲しい」と言い、消えて行きました、目覚めた嫁はしばらく考えておりましたが、これが佛の夢知らせであると思ひ、石田清七家に嫁いだ妹を呼び出し、二人で暗くまだ夜明けにはまのある寂しい山道を急ぎました。

その頃多幸の浜には二本の尾を持つ「猫また」と言う化け猫が住むと信じられていて、島の人には恐れられていた所でしたが、姉妹は手を取り合って山道を急ぎ、やがて多幸の浜に着きました。

二人は暗い浜辺のここぞと思う所を探しましたが、これと言う物は見当たらず、冷たい浜辺にたたずみ、寒い海風が首筋から吹き込むので、体を固くして夜明けを待つことにしました。

やがて今まで暗かった海の沖合から、雲と波間を赫く染めて朝日が昇り始めました、ようやく辺りにも明るさが増してきて、光が二人の所に届く頃になると、いくら捜しても見当たらなかった波打ち際に、大・中・小三体の阿弥陀像が朝の光を受けてお立ちになっているの見付けました。

声も無く駆け寄った姉妹は仏像から滴る汐のしずくを、着物の袖で拭き取り押し頂いてそのまま、瀟響寺のお上人の許へと急ぎました。

姉妹が夢の中のお告げのことから、波打ち際でのことまで心急くまま物語るのを、じつと聞いていたお上人は、やおら

「今お寺ではお地藏さんを御本尊としてお祀りしているのじゃが、サテどうじろ、この大きい阿弥陀さんをお寺の御本尊としてご寄進頂けまいか、二体あ

のは姉妹でそれぞれ市郎平家と清七家でお祀りするということでは」と言いますと、姉妹は大喜びでそれぞれの嫁ぎ先の御本尊としてお祀りすることになりました、今でも、前田市郎平家と石田清七家では、代々この阿弥陀仏を御本尊として大切にお祀りしていると言います。

註、御神体や御本尊佛が海や川から漂着したと言う伝承は、各地に広く伝わっております、神津島でもお観音浦の観音堂の御本尊、多港湾の弁天が、海から渡来したと伝えられています。

註、多幸の弁財天は、宝永四年(西暦一七〇七年)十月四日の東海と南海のアベツク地震で、東海道、伊勢湾の地震被害、紀伊半島から九州、瀬戸内海で津波被害で死者二万人、家屋の倒壊六万戸、津波による流失家屋二万戸、室戸、串本、御前崎で一・二米隆起、高知市中西部の約二〇キロ平方米で、最大二米の沈下「宝永四年十月初旬、神津島の沖絵、材木、家屋の雑具、風波に任せて流れ拋ることおびただし、同月十五日、予の船にて清水六太夫が祠を拾い上げた、(弁財天縁起 清水勘太夫とあり、何を祭った祠か不明であるが、島では弁天を祀っていないので、この祠を弁天として祀るとあります。

◎、瀟響寺の祐天上人像について

平成七年八月に東京都教育委員会は法政大学教授段木一行氏を団長に、総勢四十三人の編成で、神津島の信仰関連文化財集中調査が行われました。

濤響寺本堂の内陣に祀る御本尊佛と内陣裏の須彌壇に祀る仏像十六体の内、祐天上人像の厨子の裏とその右側に墨書されている文字から、この像はかつて祐天寺の秘仏祐天上人像の、前立像であることが判明しましたが、濤響寺にもこの像がなぜ神津島に遷座したのか不明であるとしたので、平成九年二月に祐天寺で木造祐天上人像像、木造祐海上人像像と木造本性院座像を調査、同年三月に再調査の為来島しました

濤響寺の祐天上人像を納める桑木の厨子は、神津島へ遷座してから作成された物で、その厨子の背面と右側側面の墨書で、次のような記事が書かれています。地役人十代目、松江半之助、名主、七代目 清水徳左衛門、当寺二十四代 誓誓定海、招待、山田忠兵衛、親分、藤井傳次郎、祐天寺見住、十五代目、昇誓祐道、世話懸、小宮丸船頭、松本芳右衛門、神通丸船頭、松江仁右衛門、若宮丸船頭、清水勝蔵、天神丸船頭、同姓為蔵、小伊勢丸船頭、梅田又五郎、萬吉丸船頭、石野田萬右衛門、桑木寄付主、稻葉太三郎、遷座共儀、明治二十一年太陰曆、七月十八日とあり、右側側面には、念仏頭、講頭十九人の氏名が記載

されていて、明治二十一年七月十八日に、東京の中目黒五丁目の名頭山善久院祐天寺から神津島の濤響寺に、遷座されたものと判りました。

然し濤響寺側では上人像の遷座の伝承も無く、また記録も残されていないとしたので、調査員は平成九年二月二十八日に、祐天寺で祐天上人像や祐海上人像、また祐天上人の前立像が神津島の遷座した理由を調査しましたが、祐天寺側も判らないと言うことであつたと言います。

祐天寺の調査を終えた平成九年三月十四日、再調査の為来島していますが、その折祐天寺からも同行された方があつたようです。

この前立像を寄進したとされる竹姫は、清閑寺熙定の娘で幼くして五代將軍綱吉の幼女となり、享保十四年(西暦一七二九年)二五歳で薩摩藩主、島津繼豊の継室として嫁し、宝暦十年(西暦一七六〇年)繼豊逝去により落飾して浄岸院と称し徳川の大に移りました

当時徳川の大奥では祐天上人の帰依が厚く、竹姫も同様に祐天上人に帰依して、祐天寺の景観整備に大きく寄与したと言います。

秘仏として厨子などに納められている、御本尊に代わってその前に安置される仏像を前立ち、または御前立ちと言うとありますが、祐天上人は女性の怨霊、

怨霊に憑かれた女性を再度救済したことが度々あり、寛文九年(一六六九年)の、累助の怨霊を済度したことは有名で、歌舞伎、浄瑠璃、清元、講談などですが、神津島にそういうことがあったのでしょうか、そして隠されたものでしょうか、しかしそう言うことが隠し切れるものでしょうか。

いずれ何処からか洩れるものと思うのですが今だに不明で、その明治二十年頃島に何があったか調べて見ました。

明治二〇年頃、神津島に悪疫が流行したと言う話があり、東京の親戚の葬儀に参加した人の、持ち物から伝染したと言うのですが、明治十九年に三宅島伊ヶ谷でコレラが流行していますが、次のような記事が、浅沼越太郎氏編の「三宅島歴史年表に乗せられています。

明治十九年(西暦一八八六年)伊ヶ谷村コレラ流行、五ヶ村名主、教員検疫員となる、島役所より臨時傭人片野亥之吉(元流人)川口弥兵衛看護の為伊ヶ谷へ派遣、右兩名罹病殉職、島民哀れみ特に神着字王葬山にこれを葬りて祀る、(昭和三十年改葬、

明治二十一年(西暦一八八八年)神着村において初めて避病院を作る。

明治二十二年(西暦一八八九年)神着村避病院再建、とあります。

これを見ると神津島の悪疫と言うのは、若しかしたらコレラではなかったか、その流行先は三宅島とも考えられ、当時船の航行は島伝へであるとしたら、その可能性があると考えております。

然し、祐天上人は女性の怨霊、怨霊に取り憑れた女性の救済と言う、超人間的で非日常的な素質の持ち主に、神津島の人たちがコレラの退散を求めたものだろうか、疑問に思っています。

◎、逃げ込みについて(瀧響寺の過去帳から)

瀧響寺の過去帳に、次のような書き込みがありますので、文を平易にして見ました。

「昔、文化文政の頃、仏弟子になる者や尼になり、入道得度した者が多く居ましたが、これらの者の大部分は佛の心を容れて出家した者や、配偶者に先立たれそれを弔うために尼になる者なものでしたが、その他に(逃げ込み)と言って過失で当時の掟に触れた者、また、失火で山や居宅を焼いた者が、瀧響寺の住職の許でその罪の深さを懺悔し、救いを求めて来た者などがあります。

当然のことながら、島役所の取り調べは厳しいものでありましたが、その折住職が被告本人に代わって陳謝し、その者の将来を保証することを誓約して、そ

の身柄を瀧響寺で引き取りました。寺に引き取られた本人はその犯した罪の軽重で、一年とか三年の間は仏弟子や尼として、贖罪と懺悔の為に佛に仕える日々を送らせました。

その期間が終わると自家に帰して、公的にも私的にも自由な生活を保障する習慣がありました、このことは明治の中頃まで行われていたもので、罪人とは言え一旦出家して法衣をまよえば世俗の者ではなく、その罪を憎んで人を憎まざりと言う、故事のように村の人たちも黙認して、罪の縄をかけないことが慣わしになっていました。

このことは古くから何処の地方でも行われていたもので、寺院の社会救済事業とでも言うべきもので、これを「逃げ込み」と言っていました」と記してあり註、この逃げ込みについては、当時の島役所と瀧響寺の間に、ある種の默契があったとは考えられないでしょうか。

島の中での犯罪者の管理、管轄する代官所または県との複雑な文書の交換、また囚人としての煩雑な日常を考えると、何らかの取り決めがあったのではないかと、どうしても思えてならないのです。

……

涛郷寺

作者 法橋竹崎石見

祐天上人像



祐天寺

作者 法橋竹崎石見

祐天上人像

